



# バンコク便り



## 1. はじめに

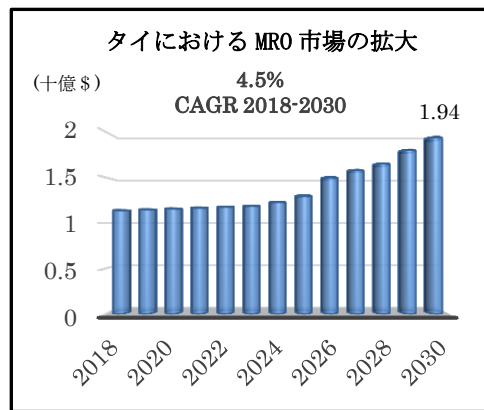
タイが入国条件を大幅に緩和した効果で世界から多くの観光客が訪れ、2022年7月における日本からの訪タイ客も昨年比約46倍と大幅に増加しています。さらに今年10月から来年3月までの期間限定で、ビザなしで45日間（通常30日）の滞在が可能となる予定です。日本側でも9月7日から、全ての入国者に義務付けている入国前72時間以内の陰性証明書の提出が、ワクチン接種3回を条件として不要となります。日本への入国が容易となることで、タイや世界との往来が活発となり、経済を刺激することが期待されます。

## 2. 現地ビジネス情報（タイの航空機産業 Vol. 3）

今回は航空機産業の現状とMRO（Maintenance, Repair, Overhaul）需要の拡大についてお伝えしましたが、今回は、タイで航空機産業へ参入している企業の紹介とMRO市場の拡大についてレポートします。旅客数の拡大により、タイを含むASEAN地域に多数のLCCが設立されたことで、同地域で航空機機材が大量に購入され、シンガポールやマレーシアを中心にOEMやTier1（メーカーに直接納入する一次サプライヤー）が各地域に進出しています。そうした状況下、タイも航空機産業への投資に恩典を与えていますが、まだ同分野で活躍する企業はごく一部というのが現状です。タイ国内で同産業へ進出し、成功している代表企業として、自動車部品製造から創業したCCS Advance Tech Co., Ltd.を挙げる事ができます。

CCSの創業者ブンジャーン氏は、過去の取材に対し「創業から自動車部品製造に携わり、精密な切削部品など金属加工の技術においては、非常に高い水準を誇っている自信はあるが、航空機部品の標準ははるかに高いものだった。最初の10年間は、スペックを実現するための品質向上の試行期間が続いたが、努力が実り、世界的航空機メーカーへの供給を実現できた。」と答えています。同社の部品はボーイング787をはじめ、エアバス等に組み付けられており、主にブレーキ・システム、貨物室システム、センサー・システムの部品や客室内の照明、椅子などに使用されています。

最後にタイのMRO市場規模については、2030年には約2倍(2018年比)となる19億94百万米ドルに拡大すると予測されています。需要は高まっている一方で、供給は需要の46%しか満たしておらず、タイ政府はEEC（東部経済回廊）内にあるウタパオ空港周辺をタイのMROハブにすることを計画しています。2018年に発表されたエアバスとタイ国際航空の共同によるMROセンター開発投資は実現に至っていませんが、MROセンターの拡大がタイにおける航空機産業拡大の重要項目となっており、アフターコロナの進展により市場環境が大きく変わることが予測されます。



出所：Knowledge Sourcing Intelligence

## 3. 現地トピックス（タイから見た東北・山形）

来月からの日本の水際対策緩和に合わせ、多くのタイ人に山形へ来てもらいたいと願う中、タイで山形がどのように取り上げられているかを、一部ご紹介いたします。訪日インバウンド向けフリーマガジンやタイ人向けWEBメディアなどでは「Tohoku・Yamagata」という形で紹介され、特に冬の魅力や温泉、寺院、牛肉等の情報が確認できます。他にも山形県タイ友好協会会員でもあるテレビユー山形様では現地の大手テレビ局と山形の魅力を発信するテレビ番組を共同制作し、アフターコロナに向けた観光誘客や県産品輸出促進のためのPRに取り組んでいます。外国人が山形を訪れた際の2次交通が課題の一つですが、タイは日本と同じ左側通行の国であり日本での運転に抵抗は少ないと思われます。レンタカーサービスを整備・提供し、山形を巡るプランというのも面白いと感じています。



Wattention ホームページ

【本件に関する連絡先】 庄内銀行営業推進部 地方創生室 軽部・齋藤 023-626-9050